

主日礼拝 2024年3月10日(日)

題 『しかし、わたしはひとりではない』

テキスト：ヨハネによる福音書16章25節～33節

明日3月11日には、あの2011年3月11日の東日本大震災から13年がたちます。地震や津波で多くの被害者が出ました。それらの方々を覚え祈ります。昨日の新聞の記事に「避難所の生活はどちらかというと楽しかった。両親の葬儀では涙も出なかった。祖母と兄の3人暮らし。喪失感は次第にやってきた。」との両親を39歳で失い、その後、震災後おばあちゃんに育てられた当時小学校1年生だった女の子、及川晴翔（およかわ はると）さんの思いの文に目と心が止まりました。確かに耐え難い辛い体験は後になって迫って来るのだと思わされます。それにしても孫二人を育てられたおばあちゃんの存在の大きさを思わされます。震災体験を今でも思い出しては苦しんでおられる方々が守られますように祈ります。

さて、今日の聖書の箇所25節には主イエスの「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。」とのことばが記されています。

イエスは弟子たちをはじめ自分の周りに集まっていた人に語られました。

聖書ではイエスはよく「たとえ」を用いて話されています。麦の種の成長の話しや羊飼いと羊の関係を表すたとえなどなどです。

たとえ話は、聞く人の力に応じて分かる話し方だとも言われます。

イエスは今からは、これからは譬えによらずに語られるということです。

「もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。」

「26:その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わ

たしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。」

これまではイエスが人々の願いを神に祈ってくださっていたのです。

しかし、今後はイエスを神の子と信じた者たちが直接神に祈り求める時がくるということです。すでにその時は来ているということを語られたのです。

ここで、わたしはキリスト者の祈り、わたしたちの祈り方について思わされたのです。わたしは洗礼を希望する方には受洗の準備会で「お祈りの仕方」をお伝えしています。大切なことは、「呼びかけ」です。祈りは神さまに呼びかけるのです。「神さま」とか「父なる神さま」とか、「天と地を造られた神さま」とか呼びかけて祈ります。つまり、キリスト者の祈りは、神に呼びかけるということです。「内容においても、形式においても」もです。そして神に対して求めていることをた最後には、多くの方はご存じのように「主イエスの名によってとか」、「イエス・キリストの名によって祈ります」と言います。それは今日の

聖書箇所の子エスが語られたことに基づいていることを気づかされます。

そして、27節には「父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。28:わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」とイエスは語られ、ここでイエスは、自分が父なる神の元からこの世に来たこと。そして、今、世を去って、父、つまり神のもとに行く、ということ語られたのです。「世を去って、」世を去る、離れる、別れるということは、やはり寂しいものであり、悲しいことであり、時に辛く耐え難いものでもあると思います。特に愛する者、大切な人とのこの世の別れは耐えがたいものです。

神はイエスの元に来る人々、イエスの名を呼ぶ者たちを愛しておられるのです。地位があってもなくても、どこの国の人でも、男でも女でも、差別なく愛しておられるということです。神さまは、自分に祈る者、頼るものたちを愛されるのです。イエスは父なる神のもとに行かれました。赤ちゃんは母親を求めます。母親も子のことは忘れることはできません。わたしたちも、正直に、あるがままの姿をさらけだして神さまに迫り祈って良いのです。神は待っておられるのです。イエスの言葉を聞いて、弟子たちは言われます。

29:弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。

30:あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」

弟子たちは、やっとイエスを、神のもとから来た方として信じたのです。イエスは、弟子たちがイエスを神の子と信じるようになったことを心から喜ばれました。しかし、この世は、現実世界は、そう甘くはないことをイエスはよく知っておられたのです。この世には、信仰者の信仰を阻もうとする力も強く働いているのです。信仰者が信仰を捨てることがないように、その時のために、イエスは語っておられると思うのです。

31:イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。

32:だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。

この後、弟子たちは十字架の子エスを前にして逃げたのです。しかし、イエスは自分を捨てた弟子たちを思い続け見捨てませんでした。ここにまことの愛があります。神の愛・アガペーです。

ひとりきりになったイエスを思うとき、わたしは詩編 23 篇を思います。

詩編 23 篇：

1:主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

2:主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴ひ

3:魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。

4:死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。

あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。

イエスは十字架の死を前にして苦しまれたのです。この後、ゲッセマネの園ではイエスは「アッパ父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしからとりのけてください。」と祈られました。しかし、その後「しかし、わたしの願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」と祈られたのです。

イエスの心には、常に「4:死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたが（つまり神が）わたしと共にいてくださる。」との思いがあったのだと信じます。イエスが今日の個所で、あからさまにこれからの自分のことを弟子たちに語られたのは、弟子たちが悲しむためではなく、愛する弟子たちの心が保たれ、生きて行けるようによりにいつも願っておられたからだと思います。

33:これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

イエスの死によって挫折した弟子たちはイエスのことば、それはイエスの命でもあります。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」このイエスの言葉によって弟子たちは再度立ち上がって生きて行っただけです。それが後にイエスの復活の出来事と神の力そのものである聖霊の降臨（ペンテコステ）の出来事により、イエスの名によって呼び集められたイエスにある群れ、教会となったのです。

イエスの言葉には力があり、命があることを思います。聖書に記されたイエスの言葉を地域に伝えるのはイエスにある群れ、わたしたち教会の働きです。教会は、神の救いの働きの良き奉仕者となって行けるといえることです。それは教会に委ねられた自由であり重い務めでもあることを思わされます。

神に託された教会の大切な働きは、イエス・キリストを土台とする信徒同志の愛の交わりによって、イエス・キリストを教会の外に伝えるということにあるのです。皆さまの上に、主の平安を祈ります。